

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

人間は社会をつくり、文化を生み出して、その多様性を広げてきましたし、文化は人間にとって大切な精神的活動です。しかし、人間の文化は野生動物にとっては時に曲者です。

(1) 原生自然といえる時代の人間の文化と、現代社会に「オウコウ」している文化とは明らかに異なります。

本来の人間社会が生み出した文化とは、生活する場所の自然環境と必要最小限に新陳代謝を繰り返すことによって成立したものであったでしょう。そこには大型野生動物もいたでしょうし、多くの野生植物もありました。イシヨクジウをそれらとの共存と分配利用により、人間社会は生活を成立させていました。人口が少ない時には、それもまた自然生態系の中の一部として組み込まれて循環系を築いていることもあったでしょう。今でもごく少ない狩猟民族ではそのような生活の仕方が続いています。A、自然と文化の共存として存続維持されることが可能な時代も長くありました。それはひとつのアフリカの大自然を「オリ」なす姿だったといえるかもしれません。そこで資本や商業的に毒された、強欲な利益追求の自然からの搾取が皆無であれば、まだなお大自然と文化との共存を言い続けることはできたかもしれません。

自然と文化の分離は、人間の強欲に根差した利潤追求、資本主義の導入、人間による自然の金銭的な価値づけなどから拡大化していきます。自然を資源と見立てたところが破壊の原点ともいえます。文化は、人間が自然と社会生活の新陳代謝の中で営む文化ではなくなってしまうました。人間社会の中でのみ規定された大自然から見ると、きわめて陳腐なものとなってしまうのです。消費を拡大していくことにより、その資源すら使い尽くし、人間社会が自ら文化の首絞めを行うようになってきているのです。

さまざまな例を挙げることができます。

前世紀の遺物ですが、野生動物の毛皮の利用があります。野生のヒョウやチーター、ライオンの毛皮は一九七〇年代前半までは、高価で豪華な衣装としてもはやられました。ひとつの衣装文化となっていました。しかし多くを利用し尽くしたために、その個体数が激減して、文化的にも停止せざるを得なくなったのです。自然からの素材がなくなってしまう文化は成り立ちません。

でも代替する素材を人間はつくることができます。原素材に固執しないことで、文化を変えつつ継承させていくことができるのではないのでしょうか。原素材を用いなければ伝統的でない、というのであれば、その伝統は変化する必要があります。その素材が大自然を破壊して公害を垂れ流すような物質であってはなりません。そして、そういう物質でしか生産できないのであれば、その時に人間社会はその文化や伝統とは別れを告げるべきでしょう。

D クロサイの角を使った刀の鞘があります。これが伝統的で文化的なものというのであれば、もはやその素材は存在しなくなる危機にあります。それでも伝統を固守するのでしょうか。代替品を作成していくことができるはずですが、漢方薬に使う原材料は野生生物である必要がどこまであるのでしょうか。人間がつくる素材によって代替していくことは可能なのでしょうか。

人間社会にはきわめて多くの伝統や文化が生まれ消滅してきています。それが単一的にならずに多様性を持つていることは大切なことです。一方で、素材としての自然破壊を続けるのであれば、自ら首をくくるような地球全体の破壊に加担していくことになることにも気づくべきでしょう。アフリカの大自然が減じたからといって、すぐに地球に影響はないというかもしれません。

そうでしょうか。大自然に向きもせず、原生自然も知ることなく、五感が鈍くなってしまう人間たちが想像力を掻き立てて人工物で創り出していく世界に未来はあるのでしょうか。

現代はまだ前世紀の遺物が活発に息づいています。まだ大自然の息吹、原生自然の漂いのある世界からの想像力、五感で感じた世界が混じり合っています。極端な話が、現代は良くも悪くも前世紀の賜物なのではないかと思うのです。

エジプト文明の発祥の地では、かつてナイル川で氾濫が起きると人々は悩みました。それが、アスワンダムができて氾濫がなくなり、近代化に喜びました。ところが、畑に塩害が生じて、かえって人々は生活に苦しむようになりました。(4) エジプトはナイルの賜物だったのが、それを無視したが故に、賜物は消滅してしまったのです。

それと同様な「コウズ」を思い浮かべます。前世紀の賜物にすがって生きて

世界で唯一印鑑文化を継統している日本はどうか。高級印鑑には象牙が使われてきました。その象牙の源はいまでもなく野生のゾウです。ゾウはアジア地域とアフリカ地域では種が異なります。日本で印鑑文化が発祥した頃にはアジア地域からの輸入でした。アジア地域のゾウからの象牙のみばかりでなく、素材の追求はアフリカの野生のゾウに及びました。ワガツキにも象牙が使われてきました。三味線のバチ、琴のツメなどです。またピアノの鍵盤にも象牙が使われている時期がありました。

象牙は野生のゾウを殺さなければ得ることができません。象牙を取るためには歯医者が抜歯するように麻酔をかけて抜く方法は使えません。B、そのことを知らずに象牙製品を使っている人が多くいます。私が一九七九年に行った調査では、五一パーセント、つまり約半数は象牙がゾウを殺すことによってしか得られない、ということを知らずにいました(調査数・三九九名)。最近では、アフリカゾウが絶滅の危機に瀕している原因が象牙を狙ったゾウの密猟であることが知られてきています。四〇年近く前と今では人々の意識も知識も変化してきました。

大自然、自然生態系からすると、日本に限らず、どここの人間社会でも伝統文化と聞くとどこか怪しげです。所詮は、人間が自然界にある素材を利用し始めたところに端を発しています。使っている素材はどこからどうやってどのように来ているのかを探ってみる必要があります。自然を資源として成立している文化は、人間社会の傲慢によって成り立っている場合が多いことも浮き彫りとなってきます。

C、身の回りにある自然ならば利用して文化をつくってよいのでしょうか。これもまた疑問があります。私のものなら何をどう使おうとよいではないか、というのが人間勝手な発想です。野生生物、大自然は人間の所有物ではありません。

(3) 大自然と文化は共存するのでしょうか。

私は、文化は柔軟性と尊厳性のある変化だと思っています。伝統もまた変化していく必要があります。

人間中心主義から一歩下がって、人間も含めた大自然と歩み寄りつつ地球で健全に生きるためには、人間社会が固執している伝統や文化を大自然に合わせて変えていく必要があるでしょう。

文化をつくるには素材が必要です。その素材が大自然からの搾取によりもたらされているのであれば、停止が必要でしょう。しかし、素材を変え

いられる時期はよいのですが、やがて前世紀の賜物は寿命が尽きて去っていきます。その後に残る今世紀の人たちに、豊かな想像力、五感力、ダイナミックな発想、活動、創造力が残るのでしょうか。大自然が健全に残されていない限り、困難ではないかと思うのです。

(中村千秋「アフリカゾウから地球への伝言」)

問一 (1)「原生自然といえる時代の人間の文化」とありますが、これがどのような特徴を持つ文化なのかを簡潔に説明した語句を二十文字以上二十五字以内で抜き出さない。

問二 (2)「人間社会が自ら文化の首絞めを行うようになってきている」とありますが、これはどういうことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問三 (3)「大自然と文化は共存するのでしょうか。」とありますが、筆者の主張する、共存可能なしかたとは、どのようなことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問四 (4)「エジプトはナイルの賜物だったのが、それを無視したが故に、賜物は消滅してしまったのです。」とありますが、これはどういうことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問五 次のア～エの中で、自然と共存していると考えられるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 印鑑文化 イ 伝統文化
ウ 人間中心主義 エ 狩猟民族

問六 A、D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

- ア また イ ところ ウ 例えば エ それでは

問七 (ア)のカタカナを漢字に書き直さない。

問八 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 象牙は高価であり、一部の裕福な人しか手に入れないために、ゾウの密猟が起きている。
- イ 伝統や文化の多くは、自然を資源として成立していて、人間の傲慢によって成り立っているといえる。
- ウ 自然破壊の背景には、人間による自然からの搾取や人間を自然生態系の一部とみなす考え方がある。
- エ アフリカの大自然が滅びても地球全体にはすぐに影響はないが、長期的には人工の代替物が不足する。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「いまの電話って、花音のお母さん？」

受話器を置いたお母さんにわたしはきいた。

「そう。花音ちゃん、蓮実を卒業まで家に置いてほしいって、おうちの人にお願したんですって」

花音、まだあきらめてなかったんだ。おばさんはさぞ大変だったことだろう。

「それで、なんて言ってた？」

「はじめは『よそのうちの子を責任持って預かるなんてできないから』って説得したんですって。でも、花音ちゃんがあんまり何度も真剣にお願いするからこまっちゃまって、相談してらしたみたい」

あ然とした。まさか、あ⁽¹⁾のむちゃな思いつきを本気でおし通そうとするなんて。

お母さんは、わたしの目をじっと見て、言った。

「蓮実、いまならまだ間にあうわ。お母さんたちに遠慮しないで答えて。卒業まで、いまの学校にいたい？」

わたしは首を(2)。

「花音ちゃんの家に住むっていうのはむづかしいかもしれない。だけど、一年くらいなら、おじさんの家からいまの中学に通うこともできると思う。わたしも、むこうとこつちを行き来してサポートするから。いたかったら、ここにいたっていいんだよ」

わたしは首を強く(2)。

「花音は……花音はなぜ、わたしをそんなにここにいさせたいのかな」

わたしはお母さんにきいた。わからない。クラスでいつもいっしょにいる友だちがいれば、だれでもよかつたんじゃないの？

「あなたが大好きで、いっしょにいたいからよ」

お母さんはわたしの目を見つめたまま、言った。

「さっき、花音ちゃんのお母さんが言ってた。これまでは友だちができて、そのうちうまくいかなくなることが多かったんですって。だけど蓮実が転校してきてから、楽しそうに学校や遊びにいくようになったって。蓮実がいなくなるって知ってから、しょっちゅう泣いてるって」

「花音は、なにかあるとすぐに泣いたり怒ったりするよ」

30

25

20

15

10

5

花音が泣いたり怒ったりするたびに、わたしは A して、どうしていいかわからなくなる。お父さんやお母さんもわたしも、大声で怒ったり、人前で泣いたりなんかしない。怒るときはしずかに怒るし、泣くときは人目につかないように B 泣いた。わたしはときどきお父さんやお母さんの前で涙ぐんでしまうことがあったけど、ふたりの泣き顔は一度も見たことがない。だから、みんなの前で平気でそんなことができる子のが、ふしぎでたまらなかった。

「きつと、安心してたのよ」

お母さんは言った。

35

「花音ちゃんにとって、蓮実は、ほかでどんなに敵をつくったりきらわれたりしても、いつもそばにいて、味方でいてくれる存在だったんじゃないかな。人にはね、絶対的な味方になってくれる人が必要なんだと思う。わたしにとっては、蓮実やお父さんがそうだし、お父さんにとってはたぶん、蓮実やわたしがそう」

「花音は、『絶対的な味方』に裏切られたと思ったのかな」

綾のときもそうだった。綾が去っていったとき、わたしは、さみしいけどしょうがないって、あきらめてもいた。だけど花音はいつまでも怒っていた。いつもは腹をたててもすこし時間がたてば C しているのに、いまだに綾のことを怒っている。

「怒ってるときの花音、つらそうだったかも」

45

50

「やみくもに『絶対的な味方』を探そうとすると、つらいかもね。そういう人って、そんなに簡単に見つかるものじゃないのよ。一生のうちに、ひとりかふたりでも出会えれば、ラッキーなんじゃないかな。わたしだって、お父さんに会うまでは、そんな人なんかいなかったもの」

お母さんは一瞬、さみしそうな顔になったあと、つぶけた。

「きつと、めぐりあわせなんだと思う。いろんな人に出会ったり、別れたりをくり返していくなかで、みんなそういう人を見つけていくんじゃないかな」

55

「もしも見つけられなかったら？」

「大丈夫。それでも人は、案外平気で生きていけるんだと思う。いないならいないで、その状態がふうだから。だけど、絶対に失いたくないと思えるくらい大切な人ができてみて、はじめて生まれてくる気持ちっていうのもあると思うの。うれしいとか愛しいってだけじゃなくて……苦しくて

60

つらい気持ちだって、もつともっとたくさん、生まれてくるんだらうね」
わたしにとつての「絶対的な味方」はたぶん、友だちよりも (3) なんだと思う。

小さなころから、ときどき考えてた。もしもお母さんやお父さんが病氣やケガで死んでしまったらどうしようって。そのたびに、**D** 深くて暗い穴のなかをのぞきこんでしまったような気分になって、あわてて目をそらしてきた。

慣れない土地の慣れない学校で、どんなに孤独な思いをして疲れはてて帰っても、うちに帰ってお母さんやお父さんと話していたらじわじわ元氣になって、よし、また外でがんばってこようって気持ちになれる。不安でたまらないのにポストンについていきたいと思つたのは、たぶんわたしも「絶対的な味方」のそばにいたかつたから。

花音にとつて、家族は「絶対的な味方」じゃなかつたのかな。

花音は家族の話をよくする。花音の気持ちを受け止めてくれるお母さんだっているし、お父さんや、大学生のお兄ちゃん、お姉ちゃんとも、仲がいいんだと思つてたけど……。

家族が彼女にとつてどんな存在なのかはわからない。だけど、わたしがいなくなつてしまつたあと、学校に、いつも安心していっしょにいられる人がいなくなつてしまうことはたしかだ。

学校にも「絶対的な味方」がほしいなんて、花音はせいたくだ。「絶対的な味方」なんて、家にいるだけでじゅうぶん。だって、わたしはこれまで、それがふつうだつたから。前の学校で仲のいい友だちがなかなかできなかったときも、あせりはしたけれど、泣きなくなるほどつらくはなかつた。それがふつう……。

もうあきるほど長い時間を過ごしてきた学校の光景が、ふつとぼやけた。花音にとつては、学校に「絶対的な味方」がいるのがふつうで、もしもその「味方」がわたしだつたのだとしたら？

「よかったね、蓮実。あなたのこと、大事に思つてくれる友だちができて」お母さんは言つた。

「でも、いっしょにポストンへ行くつていう蓮実の気持ちがかわらないなら、花音ちゃんのお母さんに電話して、そう伝えとくけど」

「ううん、いい」

いてもたつてもいられなくなつて、立ちあがつた。わたしは、自分のこ

とを考えるのにせいっぱいで、花音の気持ちを置き去りにしてしまつていたかもしれない。
花音には、明日、自分で伝えよう。

音楽室のそうじ当番をおえてもどつてきた花音に、思いきつて声をかけた。
「なに？」

花音は赤の他人を見るような目をわたしにむけた。

「すこしだけでいい。」⁽⁵⁾最後にちゃんと話、しない？」

「いそいでるんだけど。わたし、三輪ちゃんたちと帰るか……」

教室に入ろうとした花音は、**E** 口をつぐんだ。教室に三輪さんたちの姿はない。もう、帰つてしまつたあとだつた。

「蓮実は、ズルいよ」

花音はしばらくだすように言つた。

「親にくつついてただ引越すだけで、めんどくさくていやな関係もぜんぶリセットできて、新しくやり直せるチャンスがあるのに。わたしはこれからもずっとここにいなきゃならないんだよ」

「ねえ花音」

わたしははげしく打つ胸の鼓動に負けないように、言つた。

「わたしたち、みんな、ずっとここにはいられないんだよ。花音だって、そのうちかならず卒業して、新しいところへ行かなきゃならない。いまから死ぬときまでずっといっしょにいられる人なんて、ひとりもないかもしれないんだよ」

いつからだろう。もうずっと昔から、人と人は、いつか離ればなれになるものだと思つてた。「絶対的な味方」のお父さんやお母さんだつて、いつまでもいっしょにいるわけにはいかないんだつて。

「花音は、『べつのところに行つてぜんぶリセットしたい』つていうけど、わたしはずっと、おなじところにくたつていられたつた。人間関係だつて、引越しのたびにリセットしてリセットして、けっきょくなんにも残つてなくて。けど、それだけじゃ、さみしすぎるから……この先も、友だちでいてくれたらうれしい」

これまでずいぶんたくさんの人たちと出会つてきた。だけれど、引越したあともつづくような関係なんて、ひとつもつくれなかつた。

こんなわたしと、ずっといっしょにいたいと思つてくれて、ありがとう。おなじ教室にいらなくても、おなじ塾や高校に行かなくても、この先、わたしたちは友だちでいられるかな。
せまい教室で寄りそいあうだけの関係を卒業できれば、きっと、いられると思う。
花音はわたしをにらみつけたまま話をきいていた。
その目はしだいに赤く充血していき……うつむいて、泣きだしてしまつた。

(河合二湖「金魚たちの放課後」)

問一 — (1) 「あのむちゃな思いつき」とありますが、それはどのようなことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問二 — (2) には両方とも同じ表現が入ります。ふさわしい五字の表現を自分で考えて答えなさい。

問三 — (3) に入れるのにふさわしい漢字二字の言葉を文中から抜き出さない。

問四 — (4) 「もうあきるほど長い時間を過ごしてきた学校の光景が、ふつとぼやけた。」とありますが、これはどういうことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問五 — (5) 「最後にちゃんと話、しない？」とありますが、「わたし」が「花音」に、話しかつたことはどのようなことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問六

— (6) 「打つ」とありますが、「打つ」を使つた次の一～五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 打てば響く 二 心を打つ 三 手を打つ

四 雪崩を打つ 五 水を打つたよう

【意味】

ア 話し合いなどをまとめる。

イ しんと静まりかえつていようす。

ウ 深く感心させる。

エ おおぜいが一度におしよせる。

オ すぐに手がたえがある。

問七

A **E** に当てはまる語を次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア こっそり イ おろおろ ウ ハッと

エ うっかり オ ケロッと

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 蓮実は、父親の転勤にともないポストンに行くことを決めていて、それは、父親こそが自分の心強い味方だと確信しているからである。

イ 蓮実の母親は、ポストンに行くかどうか迷いはじめている蓮実に対して、自分の子どもころの話を交え、友情の大切さを説いている。

ウ 蓮実の母親は、花音の気持ちを理解してはいるが、蓮実がポストンに行くか行かないかは、最終的には蓮実に決めさせようとしている。

エ 蓮実は、自分が花音の味方であるという意識がなかつたので、花音の気持ちがうれしくて、ポストンに行く決意がゆれはじめている。

受 験 号

氏名

1

問

[illegible]

--

三三三

--

問四

--

問五

3点

問六

A
B
C
D

問

(ア)	
(イ)	
(ウ)	
(エ)	
(オ)	

問
八

5点

/ 50

2

三

--

問

--	--	--	--	--

Chapter 1

問四

--	--

問五

--

問六

一
二
三
四
五

問七

A
B
C
D
E

問
八

© 1996 by The McGraw-Hill Companies, Inc. All rights reserved. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted, in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, or by any information storage or retrieval system, without prior written permission from The McGraw-Hill Companies, Inc.

/ 50